

1

۲ ۲ پ

「九条さん、九条さん」

下校時刻です。 がらんとした玄関。下駄箱にうわばきをシュートして、あわてて追いかけます。

「いっしょに帰ろ?」

「帰らない」

「そんなこと言わっ、ないっ、でっ、さあっ」

「部活動してないのって、私のほかは九条さんだけだし」 玄関の石段を飛び降りながら呼びとめても、相手は立ちどまりません。

九条 織江は無表情でふりむきました。「だから?」

「入学した時から、あたしは部活動はしないって決めてた。あなたこそ部活やればいいじ

「えーっ……?」

肩をくねらせると、九条さんのこめかみはピクッとひきつります。

きびすをかえして校門へ向かいます。 追いかける方の彼女は犬っぽい。

「先週はつきあってくれたのに」

「あなたといると用もないのに男子が寄ってくるのがイヤ」

「べつにいいじゃない」

「あたしはイヤなの」

「そんなあ。ひどいよ。同じ音羽中出身じゃない。 仲間でしょ友達でしょう?」

「ともだち?」

校門脇のとても立派な樹の下で、ようやく九条さんは立ち止まります。

調子っぱずれなブラスバンド部の演奏が風にのって聞こえてきます。

「そもそもあたしたち、ほとんど会話したことないよね」

「……だっけ?」

と、首をかしげる仕草に、また九条さんのこめかみはピクピクッ。

「音羽中ではあなたは一年三組、 二年三組、 三年二組だった。 あたしの組おぼえてる?」

中三は同じだったじゃない。その前は……えっとごめん、 忘れちゃった」

「同じクラスだった。三年間ずっと」

「マジで」

「マジで……って、ああその反応、ネタじゃないんだ。 すごい

力無く落ちた九条さんの額がぺたっと掌に載ります。

「日ノ岡さん。あなたはあたしのこと、 ほとんど知らないでしょうけど、 あたしはよく知

ってるの。あなたがどんな人か」

「もしかして嫌われてる?」

「嫌いじゃないけど――」

ハァ、と腰に手をやってため息をつく九条さん。

好きってわけでもない。あなたとあたしは合わないってだけ」

「九条さんってハッキリ言うんだ。へえー」

感心しきりの彼女。

予想外な即答だったのか、 九条さんはためらいがちに、 でもキツい眼差しのまま言いま

す。

「あなたはおしゃべりだけど、 なんにも本当のことは口にしない。 あたしはそういうのは

「なにそれ」「ブックオフでまるまる休日つぶすみたいな?」

## 「人生の無駄遣い

「かもね」

九条織江が立ち去って、ぽつんと校門前に残されました。

抜けざまに彼女をちらちらと見てます。 バレー部の背の高い男子たちが声をはりあげて、ランニングから帰ってきました。 彼女もニコッと微笑み返します。

そしてまたひとりに戻ってみれば、微笑みはするりと落ちています。

「あっそう」

お嬢様持ちしていたカバンを背中にかつぎあげます。

「ならいいわ」

校門から車道に出て、ふだんの通学路とは反対方向に歩きだしました。

とつもなかったりで生徒たちには人気がありません。 一応そちらにも駅はあります。あるけれど峠の切り通しがキツかったり、 夕方の今も、 多少の車の通りはあっ コンビニのひ

ても通行人はぜんぜんいないです。

道脇の林の青々とした枝ぶりは、そろそろ手入れの時期ですね。

たるい」 なだらかな上り坂を百メートルもいかないうちに、 ほむらは不平をこぼしはじめます。

そう。

日ノ岡穂群はたるい。「あー、かったる」

疲れるばかりの部活なんてもってのほか。

ってます。この青藍高校ときたら、強制でもないのに生徒の部活動参加率はほぼ百パーセそのわりに、一人おさびしく下校する姿なんかは世間様に見せてはいけないものだと思 運動部も文化部もその活動ぶりはいたって活発ときています。 さすが県下一の進学

「『ほんまちのかふぇでふるーつたるとでもどうかいな』と」

携帯でメール。

ぷらぷら揺れるカバンが重そうです。

押しつける相手でもいないかなーと、 意味もなく見渡してみる。 針金みたいに細 W

フレームの自転車が追い越していきます。

うちの男子の制服ですね。

な制動だったのでちょっと面くらいました。 自転車はくるりと輪を描いて戻り、ほむらの目前でブレーキ。 それがまたずいぶんと急

「ヒノオカか?」

§ 1

いつのまにかカバンはお嬢様持ちに戻してます。

俺、東野っつーんだけどさ!こくりと頷くほむら。いつの C 組の。 あ、 一年な!」

見ればわかります。初めて話す男子ですよね。

自転車のハンドルにふと、目が。

衣替えしたばかりの半袖からのぞく二の腕。 ねじって束ねたワイヤーみたいな、ぎっち

します。 りとした筋肉。子供っぽい顔つきにはぜんぜん似あわない。眼鏡もなんだか不自然な気が

跳馬の選手みたいにサドルから跳ね降りた男子は、 もういちど名前を呼んで確認しまし

「日ノ岡穂群だよな? 一年A組の」

「ほむれじゃなくて、ほむら。ひのおかほむら」

「あ、 わりぃ。ほむらか。面白い名前だな」

男子生徒はしげしげとほむらを見て、 感心しきりに頷きます。

たいだった」

「学年で一番可愛いからすぐわかるって言われたけど、

ホントだな。

映画の

ワンシー

「なあに」

「普通に歩いてただけでしょ。 いったいどんな場面よ」

「フラれたところ」

「.....J

照れ隠しもせず、 度胸があるのか天然なのか。

こんなふうに呼び止められるのは珍しくなく、 もっと浮ついた言葉がかけられることも

よくあります。

自転車に乗せてもらったらラクそう。

「……それで東野くん。なにか用?」

「じつは部活の勧誘でさ。俺、探検部に入ってるんだ」

「探検部? そんな部活があるの?」

「あんだよ。部員はふたりしかいねーけどな」

「ふたりだけ? あなたも入れて?」

頷く東野。

それで一年坊主なのに、 部員の勧誘なんかしてるんですね。

「日ノ岡は帰宅部だろ」

「そうだけど。部活に入ってない子なら、 うちのクラスもう一人いる」

「ダメって」 おめーじゃなきゃダメ」

強引というかもう意味不明。

わざわざ追いかけてきたくらいだから、必死なのはわかりますが。

「私、部活はやる気ないんだけどね。 一応、理由を聞かせてもらえる?」

「うちの部、部員が二人しかさ

「それは聞いた。そうじゃなくて、なんで私なの?」

腑に落ちない表情で頭をかく男子。

不可解なのはほむらのほう。 が、 そんなのは意に介さず、 東野は歩み寄って両肩にぽん

と手を置きました。

「おめー魔法使いやんねー?」

マホ?

「もう一回言って」 ……なに言ってるんだ、こいつ。

「魔法使いやってほしいんだ。探検部で」

マホーツカイ?

頭を抱えるのはこらえました。それじゃあこっちがマンガみたいですから。これだった

ら自衛隊の勧誘のほうがまだ現実みがありますね。

ムのハナシね」

「普通そう思うよな。でもゲームじゃないんだ。現実のハナシ」

「妙なことを言ってる自覚はあるんだ?」

「うん」

ずっと真顔だった東野は、噴き出して笑いました。

「でもな、 楽しいぞ探検部! 日ノ岡もきっと気に入ると思う」

そう言ってばんばん肩を叩きます。

どんな根拠で断言するのか。

進学校は変人ばっかりというほむらの印象はまた強まりました。

東野はザックから何やらとりだします。

「これ部活のパンフレットな。 いま決められないようだったら読んでみてくれ

決められるか!……とは言い返せないまま、 けっこう厚めの冊子を受け取ります。 たっ

「じゃ頼んだ。また明日訊きにくっから」

た二人の部でそんな本格的な冊子だけは準備してあるとか

「あ、明日? ね ちょっと!」

自転車に戻ってサドルにまたがりかけた東野がこちらを向きます。

ほむらはためらいながら自転車を指さします。

「乗せてよ」

「俺は学校戻る。それでいいなら乗せてもいいけど」

よくみれば自転車には荷台が無く、乗ったとしても立ち乗り。

さっき日ケ窪駅まで行って戻ってきちまった」「つーかそもそも、おまえ帰るの皇子堂駅側なの? 珍しいよな。こっちの道キツいだろ。

「きょうは単なる気まぐれよ」

「ならいいじゃん。じゃあ明日な」

「ええ。さよなら」

軽快に駆けていく東野の背を、 憮然として見送ります。

それからは道を間違えたりなんだりで、彼女の足では駅まで五十分かかりました。

帰路の電車が駅にすべりこんだところで待ちかねたメ ールの返信

ホームへ踏み出しながら携帯をフリップ。

ここからメールした本町駅までとって返すなら階段を登って逆ホー ムですが、 たいした

時間のロスじゃありません。 けれど期待に緩んでいたほむらの表情は返信文の前で固まります。

『ごめんっ。

しばらく遊べない。

また今度埋め合わせするからホントゴメン』

別の高校に行った中学時代の友人もあてにならない。

いや、ちがうか。見放され たのかな。

地元の駅の改札を出ると、いつもの女性がチラシをくばっています。 水色のサマー

ター。毛玉だらけの。そのまま無視して通り過ぎます。

帰宅して部屋着に着替えるなり、 ぐんにゃりとベッドと一体化します。

程なくしてノック。

「ほむらー?」

ドアが開いてもつっぷしたまま。

「カレシから電話あった」

枕に向かってもごもごと呟きますがおそらく未知の言語です。

ゲル状生物にあきれながら少女は続けます。

耳持たなくて」

「なんか御免とか別れたいとか言ってたけど? こっちが人違いだって言ってるのに聞く

日ノ岡家の次女。ほむらの妹の月は、姉妹で声が似ていてしばしば姉と間違えられます。

やめてよね。

電話に出るのい

つもあたし

どうして家の番号教えてあんの?

なんだから。 ちょっと聞いてる?」

「ていうか、

観念して顔の片っぽだけ妹に向ける不定形の姉。

あいかわらず迷惑そうな顔つきの眼鏡がドアにもたれてます。

「もうその人とは別れたし」

「ふうん」

腕組みして鼻を鳴らす妹。

「つきあってたようにもみえなかったけど。 勉強教えてもらってただけじゃない

「んー・・・・」

まさに妹の言う通り。

波乱の合格発表が過ぎ去り、 それとなく別れ話を持ち出してきたのは彼のほう。

ないけれど。目指すゴールを共有する、 ふたり揃って同じ高校に行けたらいいね、なんて夢のような結末を信じていたわけじゃ そんなムードにひたれるだけで嬉しかった。

ところが何のまちがいか、勉強を教わったほむらが目標校に受かり、教えてくれてい た

彼は受験に失敗。

成績優秀で模試は一桁の常連、でも本番に弱いタイプというのはいるんだなと。

「利用されちゃったのよね、またまた」

「そんなつもりじゃ」

ーあかわいそう。 ほむらとつきあった人ってみんな不幸になってない?」

否定できません。

言ってみれば受験勉強だけが繋いだ縁。

ほんの何度か無視していただけ。 ほむらが被害者で彼が加害者、 そんなふうに謝られるのがイヤで、 携帯のメッセージを

女がそぐわないのかよく解ってます。 元カレは、ほむらの実力を重々承知しているので、 現在の高校の学習環境にどれだけ彼

るよ、あの人」 「また曖昧なままでキープとか? はっきりダメ出ししてあげてよね。 責任感じちゃって

「うっさいな……月のツタヤカーテン奥のエア常連」

「なにそれ」

「耳年増」

妹は肩をすくめただけ。

「あとちょっとで夕飯だから、 寝ないで降りてきてよ」

妹が階下へ立ち去った部屋。床にカバンが転がっ ています。

そういえばもらった冊子を放り込んだきりです

うつぶせのまま手を伸ばしても全然届きません。

ひとしきりどたばたと両足が暴れてベッドがキックされましたが、 すぐに坂道での酷使

の記憶がよみがえり、 ぱたりと止みました。

「じゃあ、 日ノ岡」

翌日の授業中です。

古文、じゃなくて現代文の授業ですね。

教室はまあ穏やかなものですが、生徒たちの意識が集まっているのが肌でわかります。

立席して教科書を構えたほむらの手に汗が滲みます。

脳内レコーダーを巻き戻して教師の質問を反復。

とある他愛のない詩について。

「智恵子は東京に空がないという」

女性教師が丸めた教科書でぱしっと手をうちます。

「……阿多多羅山の上の空が見たかったんです」「智恵子は頭がおかしいな。東京に空が無いわけないだろ。 何言ってるんだ、 智恵子は」

§ 1

「それが智恵子にとっては実際の空なのだと、この詩の作者は語っている。智恵子自身が

理路整然と教えてくれたのかどうかはちょっと怪しいもんだ。さて、 て考えてみるか」 智恵子の気持ちにな

女性教師は、教卓に浅く腰かけて脚を組みました。 行儀が悪いです。

ぴっちりとしたインディゴブルーのジーンズ。

「智恵子は単なるわがまま女なのか? どう思う?」

気なんでしょうこの先生は。 作者が答えを出してくれているんだから、それでい Ŋ じゃ ないです

と思ったんです」 「……智恵子は、 阿多多羅山 の思い出がすごく残ってい たから、 またその山の空を見たい

「ふーん。 つまり?」

つまり? つまり?

「阿多多羅山に登りたかったんじゃ……」

教室からくすっと、控えめな笑い声が漏れ、耳たぶがカッと熱くなります。

もう一篇ある。次はそっちを読んでみようか 「そうかもだ。そうじゃないかもだ。実際のところは知らん。

阿多多羅山が出てくる詩が

教師が手振りで、 もう座っていいと促します。

消え入りたい気持ちでほむらは椅子に戻りました。

昼食の時間です。

机を囲むクラスメー トにそれとなく尋ねてみます。

探検部? 日ノ岡さん探検部に入ったの?」

「えっと、じゃなくて。 入部しないかって勧誘されて。 なにか知ってる?」

「うーん……入学案内に書いてあったことくらい しか」

「そうねえ」

クラスメー トたちはそれぞれ弁当やパンを口に運びながら、 記憶を辿ります。

「たしか三年前に新設されたばっかなんだよね、 うちの探検部さ」

「三年前? まだ新しいんだね」

あんまりい い噂は聞か な いよね」

なの?」

進学に有利ってわけでもなし」

「だよね。活動内容が『探検』じゃあね」

「学校で一番予算くってる部活なんだって。 うちの顧問がボヤいてた。 ほら」

クラスメートが窓の外を指さします。

椅子をひいて背後の校庭を振り向くほむら。

「あのトラックフィー ルドの横に控えてるのが運動部のサークル棟。その向こうにちょっ

「ユュボンコリニ性のこうたく」と離れてゴツい建物があるでしょ」

「いちばん山側に建ってるアレ? え、まさか」

「そう。あの豪邸がまるまる探検部の部室棟なんだって。 あれに比べたらうちの部室なん

か物置だよー」

「ちょっと入ってみたいなー」

「ムリムリ。 SECOM入ってるに決まってる。厳重なんだから」

てっきりほむらは、休日に一般開放されるような公共施設かと思っていました。二階建ての屋上に天体観測ドームのついた建物は、ちょっとした研究所みたい。

「そもそもあれでしょ、探検部は資格が必要じゃない。日ノ岡さん、探検部の資格あるの?」

資格なんて初耳だとぶるぶる首を振ります。

「そんなこと東野くん言ってなかったけどな……」

クラスメートがおやっと目を見開いて、興味深げに身を乗り出します。

「東野って東野巧? あたし同じ中学。 へえー彼、探検部に入ったんだ。 意っ外だなー」

「どうして?」

|中学じゃ剣道部だっ たから。 すっごい強いの。 二刀流でね。 イ ンターミドルにも出て」

「に、二刀流?」

ほむらのイメージする剣道とはまるで違います。

「日ノ岡さんとはお似合いかもね、カレ。 まーちょい背は低めだけど」

「いいじゃん。入ってみたら? 探検部」

「ええ……?」

焚きつけられると、ついその気になってしまう彼女。

でも、それで何度失敗してきたことか。

ほむらは顔だけはニッコリ笑顔で、お箸の先っちょでは唐揚げをブチッと切断。

「でもやっぱり私、 探検隊ってガラじゃないし。資格も特に……」

「うーん、それはそうか」

そうして探検部の件が一段落すると、 話題は海外ドラマにチェンジです。

ほむらの聞いたことのないタイトルで、しかも政治劇ジャンル。何がおかしい のか全く

わからないけど、 とにかくわかったふりをして笑います。疲れます。

退屈と疎外感という重たいゲル状物質が頭上からのしかかります。

教室という公共空間でなければ、 たちまち不定形生物になって足の先から溶け出 してい

「噂をすればナントの勅令」るでしょう。

ほむらの肩がつつかれました。

クラスメートが目くばせする先。 入り口に教室内を見渡している男子がおります。

「……東野くん」

「よう、日ノ岡!」

凜と教室いっぱいに響くこえ。

弁当フレンズに押し出されながら、 浮かない気分で席を立つほむら。

「昨日の返事、考えてくれたか?」

そんな挨拶をクラスメートの頭ごしに投げかけられたり。

あくまで彼女はすまし顔で、 でも可能な限り早足で彼を廊下へ押し戻します。

「それで?」

殆どひとけのない特別教室の前に河岸を変えて、

もう一度同じ質問

のんきについてきた東野の期待顔に、ほむらは小さくため息

「変なこと聞くけど」

**\***?

渡り廊下の向こうにのぞく空は青い青いみごとな五月晴れ。

「学校生活において探検部に入るメリットってなに?」

「メリット、ねえ」

「えーとあれよ。楽しいってのはナシで」

「そうだなあ……」

くいと顎をあげて、天井をにらんで腕組みする東野。

「んーやっぱ、かなりハードな部活なのは間違いないから優遇はされてるな。 俺にはあん

まり関係ないけど」

「優遇って、たとえば?」

するとこの男とんでもないことを言いました。

「まず、部活動翌日の遅刻と欠席に関してはノーカン」

「えっ」

授業よりも部活が優先?

いいのそれは?

「追試も基本なし」

「つ、追試もなし? 無条件で?」

「うん。活動が本格的になったら、そんな暇ないだろうからな」

驚きである。優遇なんてものじゃない、まさに治外法権。

ぐらっときたほむらは、 かろうじて先ほどの忠告を思い出します。

「……でもね、進学には向かないって話も聞いたんだけど」

たいの?」 ビーとかレスリングとか。女子ならバレー部とかテニス部とかか。 進学に有利な部活ってなんだよ。 うちじゃもっぱら運動部だろ。陸上とかラグ おまえレスリングやり

「なんでレスリング」

と浮かんだ疑問を口にします。 この山猿系男子を前にするとつい発火しやすい 脳神経を落ち着かせながら、 ほむらはふ

「東野くんはスポーツ推薦でこの高校に?」

「いや、俺は一般入試だ。 それも考えたけどな」

「頭いいんだね……」

再び漏れるため息。

「なに言ってんだよ、おまえもそうだろ?」

「げふっ」

ばしっと、背中をはたかれたほむらがむせます。

確かに彼女も一般入試ではありましたが。

ほむらの頭がくたりと倒れ、 膝を抱いて座り込みます。

「ちがうみたいだな」

のだから……」 「あれはさーあ……発行枚数限定一枚  $\Box$ 、岡穂群専用スプリングジャンボ』 みたい

「なんだそれ」

「単なるマグレです。 偶然です」

「マグレで合格?」

ほんの一秒だけフリーズする東野。

「いや、無理だろ。公立でマークシートは珍しい けど偶然で入れるわけねえよ」

「え、マジ?」

マジデスと床に呟くほむら。

「じゃあ、こないだの試験はよ?」

からしめました。 先日終了したばかりの中間試験は勿論さんざんな成績で、 学級担任から両親から心胆寒

成績がクラスに知れ渡るのは時間の問題。 さいわい点数が教室に掲示されるようなことは無かったのですが、 彼女の真っ赤っかな

たフリー 口にするのもはばかられる試験の平均点を、 ズ。 今度はすこし長めの三秒間。 廊下に指でなぞってみせると東野少年はま

「……まあどっちでもいいや。 よかったな受かって」

ひょ いと躱す東野。

「ようするに私は、 ようするに私は、部活の余裕なんか無いの!」
やッドバットする勢いで立ち上がったほむらを、 授業についていくだけで精一杯なの!」

「ああ。あるじゃんメリット」

「なにっ」

「探検部に入れば大丈夫だ」

「どうして」

「そんな調子だと昨日渡したパンフも読んでないんだろ? まあ、 俺もしっかり説明

くてすまなかったけど」

自信たっぷりに腕組みする東野。

「大丈夫。魔法使いになれば、勉強なんか楽勝だから

「なんか騙しにかかってない? プロレスラーになればスクワット百回なんかへっちゃ

だ、って言ってるみたいに聞こえるけど?」

「やっぱレスリングがい いんだ」

屈託なく笑う東野

なんだか気易く話せているな、 とほむらは小さく息をつきます。

自分とさほど背丈が変わらないのもあるのか。ほむらの元カレはみんな長身で、 という

かそれが最低条件で。

「東野くんは探検部で何やってるの」

「 俺 ? 俺はまだ五等調査官だから、 もっ ぱら先輩のフォ 口 1 だな。 探検もまだ二回

行ってないし。覚えなきゃなんないことがいっぱいある」

「ふーん……先輩、厳しい?」

ほむらの脳裏にいかつい山男みたいなビジュアルが浮かびます。

メガネ山猿な後輩とのコンビはある意味絵になりそう。

自分がそこに加わったイメージは一向に浮かばないわけですが。

「優しいよ」

でもそういう彼の声は大人びていて、 ちょっとだけ哀しそうな顔をするのでした。

ほむらは少し山猿のイメージを修正しました。

「怒ったとこはまだ見たことない」

「……たったひとりの後輩だもんね。 大切にされてるんじゃない?」

「おまえが入部してくれると、 後輩二人になって部活らしくもなるんだけどな」

「どうしよっかなあ……」

首のうしろで腕を組んで、壁にもたれるほむら。

「東野くんも勧誘されたの? その先輩にさ。 それとも、そんなに探検部デビュー したか

ったわけ? あれでしょ、東野くん剣道やってたんでしょ」

「よく知ってるな。 俺はじぶんから入部したんだよ。 入ったのは……」

「うん」

\_\_\_\_\_\_

半開きの口で固まっている東野。

「うん?」

「……おまえが入部したら教えてやんよ」

「ちょ、それズルくない? ほんとに人を勧誘する気あるの?」

そっぽを向いて眼鏡を直す東野。ほむらはずりずりと前にまわりこんで追及します。

「まさか私が入部したら、 サクッと退部するつもりじゃないでしょうね」

「アホ、そんなことすっかよ」

「アホ? あんた大事な勧誘相手に向かってアホって言った?」

「だってアホなんだろ?」

<

髪をかきながら東野は言い放ちます。

「わかったよ。 勉強なら俺が教えてやるよ。 俺、 教えんのは下手なんだけど、 この際我慢

しろ

どきっとした。

ちょうど鳴りだした予鈴のせいじゃないのはわかっている。

昨日の妹の言葉がほむらの胸にぶりかえす。

「……いいの?」

観念したように、まぶたを伏せて頷く東野。

「俺から頼み込んだことだしな」

「迷惑じゃない?」

「なんでもねえよ。部活に比べたら」

ほむらから確実な返事をしないまま交渉はとりあえず一休み。 放課後また落ち合う約束

をして、ふたりはそれぞれの教室に戻ります。

と、威勢よく歩き出した東野の首が絞まります。

「おふっ」

涙目で振り返った東野のシャツ襟を握って立っているほむら。

「……おめえ、突きと同じくらい痛かったぞ」

「一応聞いておきたいんだけど」

「魔法使いってなに?」

「パンフ読めよ」

「次の授業、実験だからムリ」

「……実は俺も知らないんだ。 うちの部に足りないポジションが魔法使いなんだって、

輩が言ってたからさ」

「そうなの? じゃあ東野くんは? なんたら調査官って言ってたけど」

「五等調査官な。俺のクラスは軽戦士」

吹き出すほむら。

「戦士ぃ? アハハ、ゲームみたいね」

「だからゲームじゃねえって言ってんだろ」

教室に急げよ、 と身振りでほむらを追い立てる東野。

どうやら、ほむらさんはアタッカーとかセッターとかコー の魔術師とか、 そういう延

長線で考えているみたいですね。 先が思いやられます。

放課後です。

職員室へ向かう二人。

すっきりとしたほむらに比べると、 東野はなにやら浮かない顔です。

「見学……か……」

「体験入部くらいさせてよ。そんな得体の知れない部活なんだからさ」

自分の勉強不足をすっかり棚にあげて、当然のように語るほむら。

゙゚どうだろ。そういうのアリなんかな……」

「融通きかないなあ」

「融通っつうか……。まあ、

モリちゃんに相談してみるしかねえな」

「モリちゃん?」

「顧問だよ。探検部の。 失礼します!」

礼儀正しく、深々と頭を下げて職員室に入る東野。 いまや最も苦手な場所のひとつになった職員室では、各教科の教師がほむらに視線を注 ほむらもならって入室します。

いでいるような気がして、 ほむらはできるかぎり肩をすくめてやりすごします。

連れて行かれた先では、 見た顔の女性教師が渋い顔で机の書類に向かっていました。

「先生。東野です」

「ん~、あいよ」

ンの尻でかきます。 声をかけられた教師は、 書類とにらめっこしたまま、 まとめた髪の襟足をがりがりとペ

「モリちゃんて、藤森先生だ」と、ほむらが小さく呟きます。

ほむらのクラスで現代文を教えている藤森教師です。

いです。 ここ職員室でも彼女はとても教師とは思えない行儀の悪さで、 見る限り机の上も一番汚

「先生、新入部員を連れてきました」

「体験入部だってば」

がばっと、 顔をあげた教師の表情はそれは喜ばしく期待に満ちていました。

が、ほむらをみた瞬間にそれはみるみると色褪せ、 歯痛でもわずらっていそうな元のし

かめ面に戻ります。

「……入部って、もしかして探検部か」

「先生ほかに部活の顧問やってたんですか?」

もちろんやってません。

しばらく両手の指先をこめかみにめり込ませていた藤森は、 職員室の出口を指さして、

自分も椅子から立ち上がります。

ほむらは、ふと、書類に埋もれかけていた小さな写真立てに目がとまりました。

白黒写真の -そこに写っていたのは、 彼女の家族ではなく、 おそらく恋人で

もなく、まだ若い藤森先生と彼女を囲む友人たち。

後ろ髪引かれるほむらを東野が引っ張っていきます。

でしょう。 藤森教師は、ふたりを校長室の隣にある応接室へ連れて行きました。 間違いなく無許可

「部室で話さなくていいんですか? 確か、守秘義務が―――

「ここでいい。すぐ済むだろ」

いぶかしむ東野に、藤森はさっさと座れと促します。

むらと相対しました。その雰囲気は生徒を指導する聖職者というよりも、まるでラスボス。 女性教師は長ソファに身をあずけると、 椅子の背にぞんざいに腕を廻して脚を組み、

借りてきた猫のようにおとなしくしているほむらを、じっと見つめます。

 $\lceil \vdots \rceil$ ?

師ですが。 ふと、ほむらに既視感がよぎります。もちろん相手は授業時間中には何度も見か 何とももってまわった態度です。 そして行儀の悪さはあいかわらず。 けた教

「音羽中出身。日ノ岡穂群。よりによって、我が青藍高校に御入学とはね」

「先生、それは新入部員を迎える態度なんすか」

あきれ顔の東野の諫言に、 わかってるよと言わんばかりに藤森は頷きます。

かすかに首をかしげるほむら。

「そこに阿多多羅山があるから、はよかったな」

「……っ……そうは言ってないです……」

顔を赤らめるほむらの胸中に、よみがえるものがありました。

漠然とした記憶を、そろそろとたぐりよせます。

あの……もしかして、 以前、先生とお会いしたことない……ですか?」

あると思うね」

不敵に頷く藤森。

「教科担任だろ? それとも知り合いか?」

きょとんとしている東野をよそに、ほむらは続けます。

¯ええっとぅ……たぶん中学……二年……の……身体測定の……」

「もしかして適性試験のことか?」妙な雲行きを東野はいぶかしみながら、

ほむらに助け船を出します。

半目でほむらを見つめる藤森。

「だっけ? うん、確かそんな名前だった」

「あの試験は任意で受けんだぞ。なんで憶えてないんだよ」

「音羽中学の適性試験は、わたしの管轄なんだ」

「そう! 先生、あの場所にいましたよね」

嬉しそうに手を打つほむら。

ところが藤森はいっそうぞんざいな姿勢でふんぞりかえります。

「それだけじゃないぞう」

え

「試験後にきみを引き留めて、小一時間ほど熱弁をふるわせてもらったよな。ああそうだ。

あの放課後もこんな応接室だった」

「すいません。よく憶えてなくて」

「ふふふふ

いよいよふてくされて天井をあおぐ藤森。

心配そうに東野が尋ねます。

「なんかやらかしたんですか? こいつ」

「東野。きみ、IE適性試験はこないだ受けたばかりだったな」

「あ、はい。俺は高校編入組なんで」

「スコアは幾つだ。ああ、守秘義務は置いといて」

いいのかな、と少しためらいながら東野は答えました。

「総合値で【四五:C】です」

はち……八○!!」

東野が声を荒らげるそのわきで、当人ばかりが勘違いした感動にひたっています。

「やっぱり先生と会ってたんですね~。 私 授業中はずっと緊張しっぱなしで気づかなく

うへえ、と舌を出してソファにぐったりもたれる藤森。

確かにこんな醜態を職員室で見せるわけにはいきません。

グロッキーな教師にくらべて東野は興奮気味です。

「ⅠE適性試験スコアは二次曲線だぜ。五○と七○じゃ実質二倍違うんだかんな」

そんなに差があるの」

「はあ。そう。東野くんと私、

「○・四五と○・八のそれぞれ二乗だから……おまえと俺じゃ三倍以上も違うんだよ! わ

かってんのか?」

ほむらはきょとんとして、自分と東野をちらちらと見比べます。

「まあ、ほら。東野くんは男の子だから」

「胸囲の話じゃねえよ! ソファから立ち上がり藤森に詰め寄る東野。 なに勝ち誇ってんだよ!」

「だったら話は早いじゃん先生。 こいつはすっかり忘れてるみたいだけど、 本人の適性は

申し分ないわけだろ? 青藍高校探検部の貴重な新入部員ってことでさ」

「い~~」応接卓のへりから教師藤森のジーンズの片膝、ブーツの靴底が登場。

「や~~~」ぐぐぐとせり上がる机。ガラスの彫像がレースの敷物ごとずり落ちてきます。

「だっ!」

東野に引っ張られて、あわててあとじさるほむら。

蹴り上げられ、音もなく宙を舞った応接卓は五百四十度回転してカーペットに着地。

見事に仰向けになり服従姿勢の応接卓。お茶でも載っていたら大惨事でした。

「……ああびっくりした、びっくりした」

ガラス像を両手で摑んだまま目が点のほむら。

そんな彼女をちらりと確認してから、 机をひょいと持ち上げる東野

「先生さ、大人げなくない?」

卓上にレースの敷物を整える姿が妙に家庭的です。

「つまりあれだろ? 昔、 探検部に勧誘してフラれた仕打ちを根に持ってんだろ?」

「そうだが悪いか」

ソファの上で抱えた両膝にあごを載せている姿はすっかりだだっ子。

「悪いっていうか……」

「たぶん、 友達と一緒にノリで受けてみたんですよ。 それで印象に薄かったんだと……」

39

§ 1

なんとか場をおさめようと言い訳を試みるほむら。

でもちょっと藪蛇

かーなんてわけにはいかないんだ」「調査官は原宿あたりのモデルのスカウト ゃ ない。 そんなお気軽に探検やってみません

「そんな感じでしたけど」

あー、いや、と頭をかく東野をねめ つける藤森

在校生からの資格者探しには、 おおかた部長あたりの手引きがあったんだろうが

本来は国家機密だぞ。生徒が扱ってい い情報じゃないんだ」

「国家機密!!」

目を丸くするほむら。

なにを今さらとジト目でほむらを見つめ、 そのままスライドさせて咎める視線を東野に

送る藤森。

「日ノ岡にはちゃんと説明したのか?」

「すみません。まだです」

仕切り直して説明を始める東野。

東野自身は、彼女の抜群なスコアまでは知らずに、 ただ日 ノ岡穂群は探検部の入部資格

を有していると、 ある人物から教わっていただけ。

ほむらが望むような体験入部はムリとしても、段階的に部の活動に慣れて くようなプ

グラムはないか、それを相談しにきたのだと顧問に持ちかけます。

貰ったパンフを斜め読みどころか一ページも目を通していないほむらは、 恐縮しながら

それを聞いていました。

拳で頰杖をつきながら、 おとなしく聞い ていた藤森は言いました。

「いいか、よく聞けよ。 日ノ岡の入部を受理できない 0) は、 まずあたしがすご~くイ

ってことが大部分だが

「大人げねえ」

-それなりに! 理由もあるんだ。 理由はふたつ」

「なんですか」

「一つ目。東野、 きみの入部希望が通っ たのは、 適性試験の結果、 ぎりぎりI E反応が許

容範囲内だった―

「IE反応って……なんですか?」

「おまえ本当に何っにも知らねえんだな」「ニュースサイトもチェックしてな ľΣ

二人から責められてへこむほむら。 ツヅケテクダサイ、 と促します。

「IE反応の有無は前提条件だ。問題は東野の技術だ。 生きるための」

「生きるため。サバ 1 バルですね」

ちょっと鼻息が荒くなるほむら。ようやく探検部らしくなってきました。

「たとえば、 いまの部長は中学一年生当時から、 西表島で正式なレンジャー訓練を受けて

きている」

「れ、れんぢゃーくんれん……」

ほむらの思い描く部長のイメージがいっそうレ ベルアップしました。 山男がいまや進化

を遂げて山ゴリラです。

「……東野くんは剣道をやってたそうですけど」

あたしが相手もして確かめた。まだまだ知識は不足しているが、 「その通り。 彼の基礎体力は申し分ない。剣術であれば探検部では即戦力になる。実際に 身体センスにおいては抜

群の逸材だ。うちの探検部は運がよかった」

東野は謙遜することもなく頷きます。

ほむらは血の気が引いてきました。

「ちょ、ちょちょちょ、ちょっと待ってください」

立ち上がったほむらを二人が不思議そうに見あげる。

「探検部の活動で、剣道がどう役に立つっていうんですかァ?」

「国家機密だ」「うん」

やいやそんなっ。 じゃ、 じゃあ、 その部長さんもなにか武道を?」

「先輩は俺より強えよ。当然だけど」

藤森も相槌をうちます。

ますます青ざめるほむら。

「つまり、きみの得意技はなんだ? 日ノ岡穂群」

「私はなにも習っていませんよ、そんな格闘技とかは」

あるいは西表島送りってことですか―――!

知っている。だから何か身につけろって言ったんだ、二年前に」

「そう。

「自分の身も護れないような人間は、 探検部はお呼びじゃないんだ」

「先生、なんのために俺がいると思ってんの。 俺が日ノ岡を護ってやるよ。探検は二人行

動が基本なんだろ?」

「.....ハッ」

騎士役を買って出た東野をジト目でにらみつけ、鼻で笑う藤森。

「単なるお荷物は要らんと言っとるんだ」

「それにさ、日ノ岡さ!」

懲りない東野は、鍵盤に見立てた机を弾きながら尋ねます。

「ピアノ? 大正琴?」 「ピアノとかやってねえの? 大正琴とかさ」

突然の方向転換に驚くほむら。

「音楽もありなんすよね、

「隣区の日吉坂高校で探検部部長やってるコマ先輩とかさしぶしぶ藤森が頷く。

「日吉坂高の話はするな」

不機嫌そうに釘をさす藤森。東野は肩をすくめながらも続けます。

さらに習い事や武道のバリエーションを挙げられて混乱するほむら。

目をしばたたかせながら、東野が聞きました。

「おまえ、 帰宅部で家に帰ったらなにしてんだ?」

「私は……家に帰ったら……」

その場に立ったまま、あらぬ方向に視線を泳がせてほむらは告白します。

「寝ています……」

重たい沈黙が応接室を支配します。

東野少年はがっくりとうなだれ、 藤森教師はソファに足を投げ出してそっぽを向いてい

ぽすんとソファに戻るほむら。

ほむらの背後で、ぱたんと扉が閉まる音。

こっそりと校長先生が部屋の様子を窺っていたような。

でも誰も気にしていませんね。

耐え難い沈黙を抜け出そうと、おずおずとほむらが口を開きます。

ほらっ、大食いチャンピオンのいばら姫なら千年でもドリーミングですよ」

かすんだ目で藤森が顔をあげます。

すまん何?」

「寝だめ食いだめ芸のうち、って」

「一生寝だめしてる気かぁ?」

すると東野がVサインを藤森につきつけます。

「そっちはなんだ」

「先生。理由は二つあるって」

ああそうだ、と藤森は頭をかきつつ居住まいを正します。 といってもあぐらですが。

「残る一つはシンプルだ」

二人の瞳に順にまなざしを注ぐ藤森。

「きみたちは未成年だ。

探検部の活動には、

保護者の理解が絶対に必要だ」

振り上げた掌が差し込む夕陽を梳きけずって、壁に影絵を落とします。 帰宅したほむらはベッドに仰向けになっています。

考えてみれば、 無理矢理に勧誘された部活で、

です。何も失ったわけでもありません。 入部のダメ出しをされたというだけの話

ただちょっとショックだったのは、

整然と告げられたということ。 あらためて自分のぐうたらさ、 何につけても興味が薄くて長続きしない性格を、否定さ いつも妹に罵倒されているような言葉を、 他人から

「関係ないじゃん……」

れたことです。

寝返りをうって呟くほむら。

向上心が無かったら生きてちゃいけないわけでもなし、努力したから必ず報われるわけ



別にじぶんは誰も馬鹿にはしていない。

誰かに勝ちたい、負かしてやりたいとも思ってな

でも、帰り際に、探検部顧問はほむらたちに向かってこう言いました。

『入部を認めてほしかったら、うちの新緑祭で一位で入賞してみろ。どの部門でもい

ただし一位だ。この学校でこの分野では誰にも負けないと、証明してみせろ』

新緑祭は、お祭りの大好きなほむらも楽しみにしていた学校行事です。

中間試験が一段落して、新入生を歓迎する意味をこめて生徒会の主催する、 ちょ つ

わったイベントです。

確か、詳しい内容を記したプリントがあったはず。

そう思って、ベッドから腕を……腕は届かなかったのでつま先を伸ばして、 カバンをつ

まみあげました。

逆さまにしたカバンから、どさりと真っ先に落ちてきたのは、 昨日から入れっぱなしに

していた探検部の入部パンフレットでした。

教科書よりもやや細身の版型で、すべすべとした表紙には、 荒々しい大自然の風景をバ

ックに『探検部入部の御案内』と記されています。

その題名にはホログラムのリングが取り囲むように箔押しされています。

裏返すと色々と団体名が並んでいます。

「日本国総務省……外務省……文部科学省……UNPIEP?……なんて読むんだこれ

… 国際連合虚惑星開拓計画……? なんのこっちゃ」

本といえば、すなわちファッション雑誌を意味するほむらの読書脳には、あまなひらがなの一つも無い堅苦しい単語の羅列。それだけでもうお腹いっぱいです。 あまりにも負

なかなかページをめくる気になれずに、表紙のホログラムをくるくるとなぞっている

担の大きい本でした。

どうにも調子が狂うのは、すべて東野のせいなのです。

先ほどの東野の言葉。

思い出されるのは、

彼女に接近してくる男子のパターンは決まっています。

ほむらが欲しいか、こいつの鼻を明かしてやろうという子供っぽい対抗心か、 どちらか

です。今の学校のように緩やかに無視されることには慣れていません。

そんな境遇での東野は、 彼女にとって初めて接近遭遇する未確認男子物体でした。 U B

彼女のそれを抑えつけているのは、まさに男性への対抗心でしょう。 す。教室での関係でなくもっと間近で話してみれば、女らしい人だとすぐにわかりました。 藤森教師もじゅうぶんに変人ではありましたが、 彼女の粗暴な言動は理解できるので

自転車を押しながら、東野はそう呟きました。

出せず、気まずい雰囲気のまま別れてきました。 これくらいで諦めちゃうの? 私が欲しくない の ? ۲, そんな見当違いのことは言い

そろそろ陽も落ち、薄暗くなった部屋にノックが響きました。

**扉越しに生意気な声が聞こえます。** 

「ほむらー?

信条としています。ほむらが継続していることといったら、せいぜいこれくらい。彼氏の いる期間であっても、すっぽかすことなく殊勝に守り続けていました。まあそれも、 ほむらの父、日ノ岡雅史は週に最低二回は早めに帰宅して、ほむらー? 三年寝ほむらー? お父さん帰ってきたから」 家族揃って食事することを

月の受験勉強が忙しくなるか、来年高校に進学するまででしょう。

結局パンフレットには目を通さないまま、 階下に降り、 食卓に着きます。

今夜の夕食はチーズフォンデュです。 ワインの香りが漂っています。

妹が長いパン切り包丁で手際よくバゲットをサイコロにしています。

「はい、おしゃもじ」

母にフォンデュ用の木べらを渡されました。

食卓にアルコー ルランプの灯るフォンデュは、 ちょ っとキャンプのような野趣があって

あるメニューということなんでしょう。 ほむらは好きです。母・芹菜にしてみれば、 圧倒的に準備が楽チンなわりに、 団らん感の

そんなわけで、 冬の季節でもないのに、 日ノ岡家にはこのフォンデュセット がしばしば

登場します。

「ほむらっ、 お鍋

「おっとぉ」

妹にこづかれ、 ぼんやりとTVを見ていた視線をはがし、 あわてて鍋をかきまぜます。

鍋を焦げつかせてしまったら、 フォンデュは最悪の地獄絵図です。

いつもの調子で妹がぼやきます。

「フォンデュ用の電磁調理器とか、 ホットプレート買えば ζJ のに……」

「えー、でもそのお鍋がいいのよ。可愛いでしょう?」

ミニサラダボウルを並べながら母が抗議します。

「私も好き。 この絵柄、 もう見ないでも描けるなあ」

「ねえ」とにっこり。

若くて優しい母。

最近はショッピング中に、 ほむらと姉妹に間違われることもあります。

ほむらは母似、 妹はあきらかに父似です。 特に妹と父は近眼までお揃いです。

§ 2

「だったら焦がさないでよね、 ほむら。洗うの大変なんだから」

「私が洗うもん」

「嘘ばっか」

「月ー、お姉ちゃんを呼び捨てにするんじゃない

風呂から上がったばかりの父が、テー ブルにつきました。

しかめっ面で月が父をにらみます。

「ん?

「……お父さん」

どうした」

「雅史さん、お風呂はこの子たちのあとにするようにしてくださいな」

しまったと、ぽかんと口をあける父。

母の言葉にはまるで逆らえないところが父の可愛いところです。

ぜんぜん気にしないから」とほむら。

「信じらんない」ダン、 とパン切り包丁をまな板にたたきつける月。

「すまん、月。ほむらも。今度から気をつけるな」

家族そろってテーブルにつきました。

他愛のない会話です。

自家用車が車検でしばらく代車になるとか、月が塾を変えたいと不平をこぼしたりとか。

ふとテレビニュースのテロップに、見覚えのある文字が踊りました。

「UNPIEP……あんぴーぷ、 って言うんだ。あれ」と呟くほむら。

「略語だから、別にどう読んだっていいんだよ。それより正式名称わかるの?」

癪に障る月の顔に、 熱々のフォンデュを押しつけてやりたい。

「違う。それわざと? 国際連合虚惑星開拓計画! 「し、知ってるって。 国際……連盟……きょ……巨大剝製……なんとかかんとか」 ユナイテッド ・ネイションズ・

オニアリング・イマジナリ・アース・プログラムね」

「ふ」ん。 で、それなに?」

がくっ、と妹と父が揃って肩を落とします。

「今どきは社会科の試験にだって出るだろ」

父の言葉に月もしきりに頷きます。

知らない。きっと月の学年からなんだね」

「そんなはずないってば。常識よ。現代用語の基礎知識よ」と月。

「UN……っていうのは、 お母さんも知らないなあ」

保険を始めるかもしれなくてな」 「あーそうか。ニュー スでは通称の虚惑星って呼ぶからな。 うちの会社でも虚惑星関連の

「あら、そうなの。でもまだ、 あっちのことはよく解ってないんでしょう?」

ょっちゅう難破するもんで、貴族に担保を依頼するようになったのが発祥だからな」 「だからだよ。先行投資だね。 そもそも保険会社っていうのは、 大航海時代の貿易船がし

「イギリスのロイズ保険組合でしょ」

「うん、そうだ。 月はよく知ってるな」と父。

ほむらの胸は、 かすかにちくり。

虚惑星か……そういえば、聞いたことがある……ような。 ないような。

「その虚惑星っていうのと、探検部ってもしかして関係あるのかな」

またもや啞然とする眼鏡父娘。

「もう、その顔やめてよね?」

ぷすっとパンに鉄箸を突き刺して抗議するほむら。

「ほむらちゃんは探検部に興味があるの?」

と母。

「えっと、 興味というか……」

「ほむら -お姉ちゃ ん部活やってな ζJ んだし、 探検部にでも入っ たらい 1) んじゃ

ر د۱

そういう月こそやってみれば? バトン回すのもう飽きちゃっ たんならさ」

昨年までは熱心にチアリーディ ング部の練習に励んでいた妹ですが、 最近はその練習風

景ともご無沙汰です。

「月は受験生だ。仕方ないだろ」

「そうです、お姉ちゃんとは違うの」

「可愛いのにねえ」

残念そうな母。

い。本当は行方不明になってる部員もたくさんいるのに、 「う……それにぃ、冗談じゃないって! 探検部なんて国の生け贄みたいなものじゃな 報道規制があって絶対ニュ Ż

にならないって噂だよ」

「……えっ」

妹の言葉に愕然とするほむら。

父もパンをほおばりながら無言で頷きます。

母だけがきょとんとしている。

「そうなの? あたしが大学生だった頃、大学の探検部で、 自作のイカダで太平洋横断し

た人たちとかいたけど。 ちゃんと全員帰ってきたわよ」

はあたしたちの常識が全く通用しない、 「っ……お母さんのそれは、いわゆる普通の探検部で、 すっごく危険な場所なんだから」 大学のサークルでしょ? 虚惑星

「ねえ、ほかにも……そういう噂ってあるの……?」

本当は聞きたくない。ためらいながらも尋ねるほむら。

「ほかに?」あるある。発信器付きの携帯を渡されて二十四時間監視されるとか、 向こう

に長時間いるだけで体に毒素が溜まっていくとか―――

ずいぶん剣吞な噂ばかり。ただのゴシップかもだけれど、 それが東野や藤森が口をつぐ

んだ「国家機密」かと思ったら、 ほむらには笑えませんでした。

サラダボウルの彩りになっている、輪切りのパプリカを箸の先でなぞりながら、 ほむら

は打ち明けます。

「実はね……探検部に入ってみようかなあ……って」

最初の面接でハネられたなんてことは言いません。 言っても仕方がないです。

「あら、いいわねえ」

嬉しそうに手をあわせる母。

「勝手にすればあ」

妹は口にふくんだプチトマトのへたをぶちっと。

つと、父をみれば、冷蔵庫から発泡酒をぶらさげて戻ってきたところ。

「ねえどうかな。お父さん」

ほむらの尋ねた先で、缶がプシッと鳴ります。

「ん? 部活か。 いいな、何か始めるのは父さん賛成だ。 勿論学業が優先だが、 ほむらの

%合、もうちょっと体も動かしたほうがいい」

「まだ入れるかどうかわからないんだけどね」

控えめに笑うほむら。

「大丈夫よ。ほむらちゃんなら」

「道具のことだったら心配しないでいいぞ。そういうのは服やマンガとは違うからな」

「そういうのは国が全部揃えてくれるみたいだけど……」

あのグラウンドに建っている要塞をみれば、 それは一目瞭然です。

国?

と月の指先が止まりました。

勢いよく発泡酒をあおってから、父があらためて尋ねます。

「で、何部に入るって?」

「探検部」

「母さんはとてもいいと思うわ」

「探検部って探検部か?」

父の眉間にみるみる皺が寄っていきます。

58

「UNPIEPの探検部か? 虚惑星の青少年調査官か?」

キャッチ。 ぶるぶる震える手を堪えながら、机の先の何もない場所に置かれた缶を、 そつなく月が

「だめだーっ! 絶対に駄目だ!」

本日二度目のダメ出しです。

台の上でカタカタと鍋が揺れます。 ランプの炎が一瞬消えかかり、 独特の鼻をつく臭い

が食卓に漂います。

憤慨する父の迫力は、予想していたとはいえ、 ほむらには応えます。

「ま、 まだ決まった話じゃないんだけど」

「どっちでも駄目だ! 危険すぎる! あんなのは政治家が無策を誤魔化すための目 ハイリスクノーリター

· シ !

ましだ! 月開発と一緒だ!

「で、でも、お父さんの保険会社の商品にもなるくらいなんでしょ?」

「それとこれとは違う!」

妹もここぞとばかりに父に加勢します。

「バカじゃないのほむら? 探検部は資格が要るんだよ?」

むっとしたほむらは、 つんと顎をそらして虚勢をはります。

「言わなかったけど私、探検部に入れる資格はあるの。 中学生の時に適性試験を受けて、

結果は良好だったの。だから……」

「そんなの聞いてないぞ。それに資格があろうと無かろうと

「雅史さん、あんまり怒鳴ると体によくないわ」

たしなめられ、椅子の背もたれに戻った父は、見るからに怒気がくすぶっています。

母はやわらかな笑みのまま、父に語りかけます。

「ほむらちゃんが自分から言い出したことですから、 見守ってあげましょう」

..' ...

言葉の無いほむらに、 父がなんとか落ち着きを保って語りかけます。

「すまない、ほむら。 怒鳴って悪かった。だが父さんは真面目に反対だ」

母に向き直る父。

「芹菜さん、戦争に子供を送り出したい親がいるかい?」

戦争?」

母がきょとんとする。

§ 2

けた代理戦争なんだ」 「うん。探検部なんて聞こえの いい呼び方はしているけれど、 これは国同士のメンツをか

だよ。 も許されるような、 きずっている元選手たちがいて、彼らはろくな補償もされずに、ひどい生活をしているん 大勢の若者がドラッグで使い捨てにされたんだ。大人になっても、 「ベルリンの壁の崩壊以前、 あれこそが冷戦時代の戦争だったんだ。探検部はね、 秘密主義と体制主義の巣窟なんだ」 社会主義国ではオリンピックメダリストを養成するために、 華やかな成果さえあれば何で いまだにその障害を引

はそんな悪いことには手を出さないわ」 「うーん……代理戦争の犠牲になった選手の人たちは本当に可哀想だけど、 ほむらちゃん

んだ」 「本人にはわからないんだ。組織ぐるみで洗脳されてしまうんだよ。それが一番恐ろしい

「多かれ少なかれ、 そんなものよ? まずはやってみないと。ねえ?」

「う、うん……」

母のしっとりとした指が、ほむらの指先に触れます。

ったとは言い出せない雰囲気です。 ちょっとばかり家族会議に議題を提出してみただけで、 実は早々に入部を断られてしま

むらちゃんが危ない目にあったってわけじゃないわ。 「さっき月ちゃんが言っていたのだって、あくまで噂に過ぎないんでしょう? 入部してみて、 ほむらちゃん自身に まだ、

その目で判断してもらえばいいんじゃない?」

「どうだか」ぼそりと月。

「それでは遅いよ。 そもそもね、 無理があるんだ。 探検部の就業年齢に…

そこで肩を落とし、大きくため息をつく父。

「やめよう」

「そうね……またあとでお話ししましょう」

母はまだ父の説得をあきらめてはいないようでした。

父もここはおとなしく頷くだけです。

「鍋、焦げてる」

います。 しい匂いが漂います。 うんざり顔の月が、 波打 チーズの湖を木べらで引っかくと、 ち際 からは パ リパリに焼けたチー 鍋底はガリガリと音を立て香ば ズがめくれてささくれ立って

「あ、私、それ好き。チーズのお煎餅\_

「俺もくれ」

「もうフォンデュじゃない」

61

§ 2

「これじゃあまだインパクト弱いんじゃない?」 『全力でブラスバンドが伴奏するカラオケ大会』……などなど。 『バスケ・バレー・ハンドボール頂上決戦』『一メー その先では、残りのポスターがまだ貼り途中。 トーナメントやコンテストなど、参加型の企画が多いようです。 夜光塗料残ってたよねー」 ルでも飾れってんですかー?」 トル以下は文字じゃな 61

§ 2

それはそれはパワフルな握手です。

よろしくお願いします」 青藍高校生徒会長、

Y e s !

六地蔵宝。

六地蔵宝をよろしく

が手渡されました。

あれは確か……

貼り出されたばかりのポスター群を、

ほむらはぼんやりと眺めます。

各部が提案し、

生徒会によって選抜された十の企画で構

一年生が参

新入部員の募集から、

新緑祭の各種出し物へ。

新緑祭の準備が進む校内では、廊下のポスター

が貼り替えられていました。

この学校にきっぷのいい女性が多いのは何か引きつけるものでもあるのでしょうか。

「どうかな、日ノ岡さん。そちらの企画なんかおすすめだな!」

手渡されたポスターを指さす生徒会長。

言われるままにポスターをするすると開くと、芸妓というか舞妓さん風のしどけない着

物女性のイラストと共に、企画タイトルが現れました。

これは、ハつゆるあれです。「『茶道部・水泳部合同「大和撫子コンテスト』……」

これは、いわゆるあれです。

「いまどきミスコンとかセクハラですよねえ……」

とぼやいて、またもや殴り倒される二年生。

尻に敷かれ気味の先輩男子は、確か生徒会の会計役です。

「あんたねえ、こんなウケの取れる企画はないのよ。 伊達に毎年恒例でやってるわけじゃ

ないんだから」

「よく学校が許可してくれましたね」と感心するほむら。

「名目上は水泳大会だから」

苦笑いのほむらに、しれっと答える生徒会長。

「はあ……えっ?」

思わずポスターを二度見するほむら。

点との合計点で競われるという変態ルール。 よくよく企画要項に目を通してみれば、茶点ての芸術点と、 五十メ ŀ ル自由型の技術

「我が校自慢の屋内プールが大活躍するってわけよ」

「その場で着物を脱いで水着に着替えるところがハイライトです」

「うひゃ……」

ショーアップにもほどが。

「でも、せっかくなんですけど、一年生にはハードル が高いというか、 あんまり進んで参

加したがるとは思えないんですけど……」

「ふふふ、優勝者には図書券。そして副賞は……所属部の予算二倍権!」

「あ、なるほど」

それは、各部がこぞって精鋭を送り出すわけだ。

生徒会は恐ろしいところです。

「かくいうわたしは一昨年の優勝者である」

得意満面に、両手親指で自分を指す六地蔵。

「わあ、すごいですね」

素直に感心するほむら。

「いいわよ褒めてもっと褒めて」

§ 2

が大幅に下がったんですよ」 「……ほんとひどいもんです。 生徒会の総取りですから。だから去年からは技術点の割合

「余計なっ、ことをっ、言うなっ!」

叩かれながらも、ちゃんと作業を続けているところは実に手慣れたものです。 ポスターが激しく折れまがるほど、叩かれまくる会計さん。

目を輝かせてほむらを振り返る生徒会長。

「じっさいどうカナ? 日ノ岡さんなら、 着物もよく似合いそうだし、 かなりい いセン狙

えると思うんだけど」

「あの、せっかくですけど……私、お茶の作法も知らないし、 水泳も得意じゃない

おまけに本もそんなに読まないので」

「大ー丈夫。あんなの遊びだから。結局人間は中身だから。

中身は外見に出るの。

外見の

きれいな人は心もまっすぐに育つの。 あと着物を脱ぐ時はなるべく色っぽく脱いでね」

ねっ、と言われても返答に困るわけです。

「有力候補がいないと、先輩のトトカルチョ計画も崩れてしまう……と」

「山科、あんたそろそろ黙らないとねえ」

と唇に人差し指を置いてほむらに目くばせする会長

どうやら今年も生徒会から擁立した刺客を送り込む算段のようです。

生徒会は本当に恐ろしいところです。

またポスターを振り上げた生徒会長の動きが、 はたと止まりました。

「そういえば、日ノ岡さんは何部だったっけ?」

「私は……いえ、 帰宅部なんです」

「マジ?」

「はい」

「じゃ、生徒会入んない? 入って? 入れ!? カマンジョイナス!!」

「って会長? もう今年の役員は決まったでしょ」と山科。

確かに生徒会役員選挙は、先日、対立候補なしでつつがなく終えたばかりです。

「会計のポストが空いたからたった今」

笑いながら、空の掌をさしだす生徒会長。

ほむらも端を押さえて手伝います。ほむらからポスターを受け取り、会長みずから壁に留めていきます。

勧誘を断られた空気を察した会長は、 名残惜しそうに頷きます。

会計が不慮の事故で死んだりした時に備えて、 「そーか、それは残念だ。……ま、それはそれとして、いつでも遊びに来ていいからねぇ。 生徒会の雰囲気に慣れておくとい いと思う

§ 2

「あ、ありがとうございます。嬉しいです」

会計の山科先輩は、さらなる飾り付けを取りに準備室へパシリ中。

最後の一枚、さんざ殴り倒されてヘコんでしまったポスターを押し伸ばしながら、 ほむ

らは会長に尋ねました。

「あの、会長? 一ついいですか?」

「なにかな」

「新緑祭には探検部は出ないんでしょうか」

「ああ、探検部ねえ」

押しピンを置く位置に悩みながら、会長は呟きます。

ことにしたようです。ポスターを製作した部にとってはいい迷惑。 整然と貼り出すのはもはや放棄されて、むしろぐしゃぐしゃ感を活かしたアートで

「今年は残念ながら企画の提出はなかったなあ。わたしも期待してたんだけど」

「やっぱり部員が二人だと、難しいんでしょうか」

「ん、三人だよ?」

え? 探検部って二人じゃ―――

しばしの沈黙ののちに、六地蔵はほむらに向き直りました。

こころなしかその表情に硬さがあります。

「誰から聞いた?」

「えっと……東野くん、です。探検部の」

「あの小僧……」

憎らしげな眼差しで、指先のピンを睨む六地蔵。

すっと表情を緩めてほむらに向き直ります。

「もしかして日ノ岡さんって―――」

そう言いかけながらも、六地蔵はふっと言葉を切ります。

ほむらの肩越しに投げかけられた彼女の視線。

なにげなく振り返ってみると廊下を抜けたその先に、 細身のジー ンズのシル エ ッ ŀ が立

っています。

東の間、 六地蔵とその人物との視線は鋭く拮抗していたかのように思えました。

ですが結局、相手はすぐその場を歩き去り、 生徒会長もまた、 ただ肩をすくめてほむら

「ん、いいや。気にしないで。に言うのでした。

勘違いだわ」

§ 2

ほむらもそれ以上追及はしません。

手伝いの礼を言われて送り出されます。

巻き込み巻き込まれてなんぼだ! 「ありがとう、日ノ岡さん。気に入った企画があったら、 ロールユー!」 ぜひ参加してみて? お祭りは

「ア、考えてみますっ」

「か、考えてみますっ」

「前向きに検討よろしく!」

その日の帰路。

通勤快速のなかで。

別の高校に通う友人に、メールを送りつけようとした指先が止まります。

摑みのギャグが満足に練れなかったのと、どうしても愚痴、 というか相手への不平不満

のようになってしまう文面に嫌気が差しました。

流れていきます。 結局そのメールは破棄して、 手すりにもたれて車窓を眺めます。 見飽きた路線の風景が

そろそろ夕暮れという頃。

駅に着いて改札から出ると、 またあのサマーセ ーターの女性がいます。

ほむらは駅キオスク脇の自販機で紙パックのコー ヒー 牛乳を買い求め、 その場でストロ

-を挿しながら、女性の様子をしばらく見やっていました。

いつものように控えめに声をかけて、 チラシを手渡そうとしていますが、 手に取ってく

れるのはせいぜい三十人に一人です。

この駅で彼女を見かけるようになって、かれこれ三年。

電車通学するようになってから気づいたことでしたが、女性は週に決まって一回、 また

は二回 (二度目は休日に)、 少しずつ曜日を変えて現れるのでした。

と思ったのを憶えています。 髪でした。それが後ろに束ねるばかりになり、 毛玉の目立つサマーセーター。短い髪。最初に見かけた頃は、もっとずっと長い美しい やがて今みたいに短くなって、 勿体ないな

「……お化粧、うすいな」

コーヒー牛乳をすすりなが Š 駅舎の壁を背にして、 ほむらは女性をぼんやりと眺めて

います。

女性は化粧も最低限で、 その乗りも決して良くはないようです。

ない苦労がにじんでいます。 まだだいぶ若いはずです。たぶん二十代後半でしょう。 けれど指や目元には、 拭いきれ

「いつまで続けるつもりなんだろ……\_

ほむらは、 彼女を最初に見た時は、 あ、 可哀想だなと思いました。

自分の身近で起きたならどうしようと恐ろしくもなりました。

ています。 いなと感じてしまう自分がいます。 でも今ではすっかり見飽きてしまって、 時折ささいな変化があったりして、 何の感情も湧かず、 目に留まるようなことがあると、 駅の背景に埋もれてしまっ 辛気くさ

たテープが変色するほどに色褪せてしまっているということ。 駅掲示板には、 彼女の配るチラシと同じものが貼り出されています。 違うの は貼り付け

してしまったものでしょう。 ほむらの足下にも一枚、 チラシが風でめくれました。誰かが受け取りながら手からこぼ

しゃがみこんで拾いあげます。

## 『この子を探しています』

まだ幼い赤ん坊の写真が、きょとんとこちらを見つめています。 もしも捨てられない望みを抱いてしまったら、どうやって諦めたら Ú いのでしょう。

行方不明時は一歳一ヶ月だったと書かれています。

「じゃあ、 もう四歳だよ……」

行方不明時の服装は そんな情報は、 まるで無意味

最後に見かけられた場所は、 この駅からすぐ近くにあるデパ | |-0 レ ストランフロアで

わりに二十四時間営業のスーパーとダイソーが入っているだけです。 その場所にしたって、 もうデパ ートは撤退してしまってレストラン街も無くなって、

田舎のお祖父ちゃんお祖母ちゃんにちやほやされて、誕生日ケーキを食べて。「ほんとうだったら、幼稚園に通って、七五三の参拝をして……」

この赤ん坊と彼女の、 身近にいた人は今どうしているんでしょう。どうして、

ないんでしょう。 必ずいるはずの、 この子の父親は

そんな事情のすべては、 どうせ、ほむらとはまぁるで関係の無いどーーでもい

かけがえのな 世の中には、 い家族を失っています。 今日も不幸な人がたくさんいて、不条理な事故や事件で命を落としたり 自業自得の人はもっとい っぱい います。

そんなの気にしていたら、どこへ行けるっていうんです。 子供を失った彼女よりも不幸な人はいるのです。幸せを比較できるのなら。

ップスは唄っているじゃないですか。

自分が幸せにならなかったら、 マ ンガだって叫んでます。 どうやって人を幸せにできるの?

変わるんだ。思い出は消えない。だから、忘れろ。

「無理だよ。誰か

誰か? 誰が?

彼女はあの場所でずっと、 人の流れの中に立って、 からくり 人形みたいにぐるぐるとま

わって、頭を下げ続けて……

オネガイシマス。オネガイシマス。 オネガイシマス。

「あの」

いつのまにか、

片手にチラシ。 もう片手にはコーヒー牛乳の紙パックを握ったまま。ほむらは女性の前に立っていました。

 $\stackrel{\textstyle \square}{\vdots} : : ?$ 

一瞬おやっとなった女性は、 すぐに柔らかく微笑みました。

「おかえりなさい」

制服をまぶしそうに見つめます。

彼女の微笑みを初めて見たかもしれません。 それがどれだけ寂しそうでも、 ほむらは声

をかけて良かったと思いました。

「高校生になったのね」

,つ。 あの、

さっと、 壁際に走りカバンを置いて、また戻ります。

「あのっ、 もしよかったら私、手伝います」

チラシの束に向けて、 両手を差し出します。

「ありがとう。でも、大丈夫」

大丈夫。その言葉はずしりとほむらの胸に響きます。

たとえるならヘビー級ブロウ。

自分の気まぐれで無責任な思いやりは、リングの外まで軽く吹っ飛びました。

差し出した手のやり場を失って凍りつくほむら。

周囲を行き過ぎる通勤客たちが、ちらりとほむらを見やって、またすぐに夕暮れの駅ロ

ータリーに溶け込んでいきます。

「いえ、あの、

見られるのは気になりません。ただ、くたびれきった女性の眼差しが

なのに、 その奥底では毅然とした意志を失っていない母親の瞳が、 ほむらを緊張させる

のです。

マンガやドラマで繰り返された正義と同情の言葉が頭を駆け巡ります。

家に帰っても、 出てきたのはそんな最低の言葉でした。 やること無くって、 退屈なので」

「……だ、だめですか?」

ほんのちょっとの沈黙。

くすり、と女性が笑いました。

「じゃあ少しだけ、頼んでもいいかな?」

「いいえ。ありがとう。嬉しいです」

「はい。すいません。わがままいって」

チラシの束の半分を受け取ります。 ほんのりとインクジェットの匂い。

見慣れた女性のやりかたを真似て、通勤客や家族連れ、 同年代の学生に向かって、声を

かけながらチラシを差し出します。

別に何も変わりません。ほむらの顔を見て珍しそうに受け取った相手も、お馴染みのチ

ラシを見るなり、 結局、思うようにチラシをさばけないまま、 興味を失ってぐしゃぐしゃとポケットに詰め込んでしまいます。 帰宅ラッシュのピークは終わりました。

一息ついた女性が、ほむらに深々と頭を下げます。

「よろしければ、お名前を聞いてもいい?」

「はい、私——」

ほむらが名乗ると、女性は自分の名刺を渡してくれました。

スにしまい込みました。生まれて初めて受け取った名刺でした。 それはチラシにあるのと変わらぬ連絡先でしたが、ほむらは大切にその名刺をパスケー

「遅かったわね! 軽戦士!」

「あ?」

東野が顔をあげると、頭上から見下ろすほむらと目が合いました。

踊り場で折り返す階段の上段から、手すりに両腕でもたれかかるようにして、ほむらが

のぞき込んでいます。

「あなた、あれくらいで諦めちゃうの?」

「……はあ? 部の勧誘のことか?」

ほむらが東野と対面するのは休日を挟んで四日ぶりです。

「そう。それくらいで放り出しちゃうの? 私が欲しくないわけ? 適性スコア【八○:

B】。この超有望な調査官候補生をモノにしたくないの?」

「なっ、何色だ」

79



マイペースで一歩一歩、階段の踊り場まで登る東野。

顔を赤くしたほむらが階段を駆け下りて合流します。

東野は、 真剣な顔でほむらに告げます。

「あきらめてねえよ」

がりがりと頭をかきました。

「あれだけ言われたら誰だってショックだろ。 気持ちを整理する時間が……いるって思っ

たんだよ」

この山猿にもそんな配慮ができるとは、ほむらにとっては大層な驚きでした。

ここ数日、 ひとりで煩悶していたほむらの胸にふつふつと湧き上がってきた、 やり場の

ない怒りが少しは静まりました。

「そ、それは、ありがとう。でもね、 私 決めたから

「なにが……」

ニヤリとしたほむらは、握り拳で東野の胸を小突きます。

アレか? モリちゃんの 『条件その一』 か?

「うん。ちょっと来て」

東野の袖を引っ張って、 また駆け出すほむら。

ある廊下です。 二人がやってきたのは六地蔵生徒会長たちがポスターを貼り出していた、 長い掲示板の

なかなかの人だかりです。

新緑祭。その十大イベントが、

ずらりと並んで新入生を待ち構えています。

一年生たちは気になるポスターの前に陣取って、あれやこれやとイベントの内容を吟味

しあっています。

そこへ現れたほむらには、いやでも注目が集まりました。

「みんな楽しみにしてるのね」

「······

東野もまた、もの問いたげにほむらを見つめます。

「さて、どちらの企画にしたと思うかしら? 東野くん?」

「おまえさっきと態度違くねえ?゛あー、そうだな……」

東野は一通りポスターを眺めわたしながら、 数日前の会話を回想します。

藤森教師の提示した条件その一。

新緑祭イベントのどの部門でも良い。 厳密に考えれば、二年三年は出場しないのですから、学校全体ではなく、 優勝し、学校で一番であると証明すること。

位ということになるのですが。 ハンデのつもりなのかもしれません。

しかし、それを彼女に伝えたところで、何の気休めにもならないことは解っています。

東野は目の前のポスターを指さしました。

「……これじゃね? 『園芸部・手芸部合同企画 食べられそうで食べられない少しだけ

食べられるフラワーアレンジメント』」

「惜しい。ハズレ。違います」

すまし顔で、首を振るほむら。

「なぜそれだと思いましたか?」

「花柄だったから」

「はなッ―――ちょっ、てめ

「なんだよヒントかと思ったろ」

また顔を染めて、スカートを押さえてあとじさるほむら。

あきれ顔で早々にお手上げポーズの東野。

「さあな? 教えてくれ」

ほむらは生徒たちの背後を横にずれていき、合法ミスコンならぬ『大和撫子コンテスト』

は素通りして……とある企画の前に立ち止まりました。

「これです」

「サイケデリックなポスターだな」

ほむらが掌を置いて示したのは『家庭科部 お弁当コンクール』でした。

皺だらけのポスターには、一面に大きな弁当箱が描かれ、 折り紙で作られた色とりどり

の具材が、立体的に貼り付けられています。

「なるほど」

東野はポスターを見据えて腕組みしました。

「ねえ、日ノ岡さん?」

たまたまその場にいたクラスの女子が、話しかけてきました。

「日ノ岡さん、『大和撫子コンテスト』には出ないの?」

「う、うん。私こっちの『お弁当コンクール』に参加したいの」

クラスの女子がそれは残念そうな顔をします。

「えーっ、もったいない。わたし、先輩から聞いたんだけどさ、 この毎年恒例の企画、

徒会の予備選って言われてるらしいよ」

「なんでだ?」

東野が口を挟みます。

「あっ、C組の? 東野くん?」

東野はそれなりに女子の間でも知られているようです。

「うちの学校って代々、 圧倒的に女子の生徒会長が多いから、 この企画で有名になっちゃ

うと、もうほとんどそれで決まりなんだって」

「ん? もう生徒会選挙は終わったろ?」

「一年でいきなり生徒会長にはならないでしょ。 二年生であらためて会長に立候補するっ

てことじゃない?」とほむら。

「女系社会ってことか」

東野はなるほど、と頷きました。

「まあいいや。それより、問題はおまえの方だよ」

「そ、そうね」

「日ノ岡の決めたことだから。俺は口出しはしない」

「ご配慮いたみいります」

「でもやっぱりわかんねえな。 『大和撫子』は要はミスコンなんだろ。

にしないんだ」

「口出してるじゃない、思い切り」

クラスの女子も詰め寄ります。

「そうよ。日ノ岡さんなら絶対優勝狙えるっ て。 つ てい うか、 わたし、 日 岡さんの着物

姿見たいなあ~」

「水着くらいどうってことないだろ\_

「ちょっと、きみたち」

ほむらがたじろぐと、その背後にはさらに男女生徒の人だかりが出来ていました。

興味津々にほむらの様子をうかがっています。

「日ノ岡さん『大和撫子』出んの?」「俺っちも応援にいくよ?」

「わたし水泳部なの。日ノ岡さん、ぜひ出場してほしいなあ」

「茶道部もいるぞ。 なんならお作法、 特訓コースで伝授するから」「おまえ、 それ出来レ

- ス過ぎ」

いえ、あのね? 私、『お弁当コンクー ・ル』に出ようかと

お祭り好きな生徒たちの気迫に圧されたほむらが、 振り返って東野の姿をさがすと、 壁

際で感心顔で女子と会話しています。

「日ノ岡って人気あんだな」

「それちょっと今さらじゃないの? 東野くん」と女子生徒。

ぐぐぐ奴め、所詮はエロ男子の一角か、と内心で毒づきます。

周囲に雰囲気ができると、つい乗せられてしまうのがほむらの弱いところです。

でも、今回だけは負けるわけにはいきません。

意外なところから、助け船が出されました。

「ふーん。おベコンか」

モリちゃん」

「藤森……先生」

淡々と藤森はほむらに告げます。

「いいんじゃない。やってみたら」

「応援してくれるんですか」

「応援できないからいいんじゃないか」

「……はい」

ハッとしたほむらは、 しっかりと頷きます。

「ひでえな先生」

「色気づくなよ、一年坊主どもが。人生は色気より食い気だぞ」

東野の非難も軽く受け流して、 職員室へ去っていく藤森。

結局ほむらには『大和撫子』の脈無しとみると、 人だかりも解消してまばらな廊下に戻

ります。

ほっとしたほむらに、 東野は言います。

「さっき、 ああは言ったけどさ。コレって一本絞ったんなら、 それでとにかく頑張ってく

れ日ノ岡。 こっちはこっちで出来ることをするからよ」

「うん、 ありがとう。……ところで具体的には何を?」

「細かいことはあとでな」

確かにそろそろ休み時間も終わりです。

東野と別れて、その場にまだたむろしていたクラスメートの女子と共に、掲示板の廊下午後の選択授業の教材を教室に取りに戻らないといけません。

を去ろうとしたほむらは、ふと一人の女子生徒が目にとまりました。

一人きりで、胸に教材を抱えて、すこし寂しそうにポスターをみています。

ほむらはにこやかに話しかけました。

「九条さん?」

同じクラスの九条織江です。

一緒に下校しようとしてフラれてしまって以来、 久々に言葉をかわしました。

「九条さんは何か参加するの?」

「……いいん」

九条は小さく首を振ります。

「これって自由参加でしょ」

「うん、そうだけど。基本はお祭りでしょ。 勝ち負け関係ない企画もあるよ」

「あなたは出るの」

「私は、この『お弁当コンクール』に出ようと思ってます」

無表情でほむらを見つめる九条。

「そう」

と呟くと、すっときびすを返し特別教室へと向かっていきます。

午後の授業の予鈴が鳴りはじめます。

急ぎ足で歩きながら、ほむらの脇でクラスの女子がささやきます。

「九条さんって……ちょっと怖い感じ」

「えっ? そんなことないよ? 私、同じ中学」

「それは知ってるけど。 放課後もすぐ帰っちゃうし、 あんまりノリよくないよね」

「うーん……」

帰宅部については、ほむらも何も言いません。

九条のことは何も知らないのだと、 あらためてほむらは思いました。

4

## 早朝。

日ノ岡家。

朝早くから出勤していった父の車を見送り、庭で新聞を広げる月。

雲間には所々晴れ間がのぞいていて、今日はいい天気になりそうです。 ひやっとした朝の気配が、パジャマの裾から忍び込んできます。

「コボちゃんも遂に高校生か……」

ブレーキ音が響きました。玄関前から聞こえてきたような気がします。

聞き慣れた郵便配達の自転車とは違います。 ましてやアグレッシブなヤクルトおばさん

でもありません。

ってます。東野です。 月が玄関にまわってみると、高校制服の男子が自転車にまたがったまま、パンなんか齧 月が顔を出したのに気付いたら、あわてて食べかけを飲み込みました。



威勢の良い挨拶が飛んできました。

「おはよう!」

「……お、おはようございます」

新聞を広げたまま、引け腰で挨拶する月。

誰? 何なの?

あたしパジャマ見られてる? 通報? 通報?

折り重なった疑問符が月の頭を駆け巡ります。

「もしかして、日ノ岡妹?」じっと月を見つめていた東野が尋ねます。

こくこくと頷く月。

携帯を出して現在時刻を確認する東野。

「……ほむら、まだ寝てる?」

またもや、こくこく。

月はすぐさま玄関にとって返し、二階に駆け上がります。

「ほむらっ、ほむらっ!」

ノックを省略してほむらの部屋に飛び込み、 掛け布団をひっ ぺがし てベッドで丸まって

いる姉をたたき起こします。

「起きてよ、ほむらっ」

「……なに……まだ眠いのじゃが……」

ほむらが薄目で月を見ます。

枕元に積まれていた、おかずレシピの本の山が書籍流となって崩壊します。

「誰か来たって言ってんの!」

-.....ジョアで......」

「ヤクルトおばさんじゃないよ! 知らない男! ほむらの知り合い? 元カレ? スト

-カー? 通報?」

「……ええ~? どちら様……?」

のそのそとベッドから這い出し、 窓に向かって四足歩行するほむら。

もともと足りない姉の威厳が、寝起きは完全にゼロです。

「ほむら、前っ、ボタンっ!」

出窓から身を乗り出すほむら。

月は上から姉に覆い被さって、 開けっぱなしの寝間着の胸元を寄せて隠します。

玄関前の路上から、東野が手を振っています。

おはよう日ノ岡 起きたのかよ? 早く降りてこいよ!」

-

ぼんやりと見おろすほむらは、ようやく目の焦点が合ってきました。

なにしてんの、 人ん家の前で東野くんは」

「なにしてんのじゃないだろ。 昨日ちゃんと伝えたろ?」

「なんだっけ」

「ランニングだろ。 走り込みだよ!」

「……あー……あー……そうかそうか。 そうでした」

「大丈夫か?」

「ごめんちょっと待って」

「五分だぞ」

窓のカーテンを閉めて部屋に戻り、 のろのろと着替えを取り出します。

ほとんど使ったことのないトレーニングウェア。 いつだったか、 その時の彼氏の趣味に

合わせて購入したものです。

髪、 やろうか」

浮かない声で月が言いました。

ん いなよ

脱げかけのパジャマで鏡台に向かうほむらは、 さばさばしたもの。 ウ ェ アに付いたまま

のクリー ニング店のタグを取り外しています。

「そんなに待たせらんない i 寝坊しちゃったの自分のせいだし これで、 どうにか

「誰なの、 あのひと」

そう言ってランニングキャップを掲げてみせるほむら。

怪訝顔で月が尋ねます。

聞きたいことは色々あるのでしょうが、 やはりそれ が一番気になります。

「そういえば青藍高の男子制服か……じゃあ、「ん? 学校の友達」 新しいカレシ?」

「だったら、話は単純だったんだけどねえ」

窓の脇に立って、 カーテン越しに玄関先を盗み見る月。

問題の男子は、 暇をもてあましてその場で自転車の曲乗りなどしています。

「……ほむら、あーゆー趣味だったっけ?」

「だからカレシじゃないったら」

手際よく髪をうしろでまとめるほむら。 帽子をかぶればばっちりです。

「実は、私もよくわかんない」

何を着ても似合ってしまうほむらを、 月は恨めしそうに見ました。

とにかく、 これから毎朝来るらしいから」

いきなり朝から、とんでもないことを告げる姉。

これが父が出かける前だったら、ちょっとした修羅場でした。

「えーっ? 毎朝ぁ!? ちょっと、お、お母さん……!!」

した。 階下の母に助けを求めようとした月は、玄関扉の音を耳にして、 再度出窓に駆け寄りま

ちょうどエプロン姿の母・芹菜が外に出ていくところです。

きっちり頭を下げて挨拶する東野に、 ジュースなんか手渡しています。

「お母さんには、 昨日の晩に言っといたから」

「ぐぬぬ……せ、せめて夕方とかでさぁ……」

「よしっ。完璧だ」

びしっと、鏡に向かってキメるほむら。気分だけはい っぱし のアスリート。

洗顔したりなんだりで、 東野はさらに十分は待たされるでしょう。

その間にも玄関先からは、親交を深める東野と母の、ほがらかな会話が聞こえてきます。 かくなるうえは父の助勢を求めるしかなさそうです。

そだ、月。 シューズ貸してね」

「自分の履けば!」

お昼休み。

「ごめんなさい、牧野さん、みんな。今日からしばらくたほむらは弁当フレンズたちに思い切って頭を下げます。 今日からしばらくお昼タイムは別行動で……本当ご

めんなさい!」

机に両手をついて平身低頭のほむら。

そんな彼女を、 腕組みした牧野は軽蔑しきった眼差しでねめつけます。

なんて?」

昼飯時の教室。

並べた机を前にした女子たちが、窓側の陽光を背にシル エットと化しています。

机に肘をつきながら指先を組み、おごそかに呟きます。

「オトコだな」「オトコだね」「もう帰ってこないね」「短い友情だったね

牧野は片足を椅子に持ち上げ、 前のめりにすごみます。

「のう、日ノ岡の。そう簡単にうちのシマを抜けて、 カタギになれると思われちゃシメシ

がつかないんじゃ」

「………」震えるほむら。

「沈めちまうか……」

ピストル形に握られた牧野の指が、 ゴゴゴゴとほむらの鼻先に突きつけられます。

97

指がぴとっと頰に触れ、びくっとするほむら。

ひあうっ」

「……日ノ岡さん、顔に消しゴムの跡ついてる」

「え……? や、 やだ」

「さっき居眠りしてたもんね」

「あーほんとだ。『NOMO』って読める」「ねーよ」

「じゃあ『ドスッテラー』」「ねーよ!」

泣き笑いのほむらを真ん中にして、机はひとしきり笑いに包まれました。

牧野は優しく言います。

「新緑祭の、 おベコンに出るって決めたんでしょ?」

「う、うん」

ほむらの手元には大きな弁当箱の巾着袋が。 そして下にはレシピ雑誌。

言ってしまえば「単純」ですが、わかりやすいのがほむらの良いところ。

「そうなんだ?」

「じゃ、 あと二週間じゃない。頑張ってよ」

「それ、誰が味見するの? ちょっと羨ましいんだけど」

残念だなー。 日ノ岡さん、 話してみると面白いのに」

「最初、もっとおとなしい人かと思って、 ちょっとツッコミづらかったけど」

「なんて言うんだろ。食らい投げ?」

「食らい投げ?」格ゲーですか?

「そーそー。ボケに突っ込んできたところを待ち構えて、 エイ ヤッて逆方向にぶん投げる

感じね」「イミわかんねー」「別の意味でイジるのに勇気いる」

中学時代の雰囲気が戻ってきたような気がしました。

後ろ髪をひかれる想いで、ほむらはその場を後にします。

なにげなく教室を見渡したほむら。ですが今日の昼休みもやはり九条さんの姿は教室に

はありませんでした。

「ランニングどうだったよ」

「そんなにきつくなかった」

「噓つけよ。坂道で超息あがってたろ」

中庭の芝生付近には、 ウッドデッキが敷かれ、 ベンチが置かれています。 ちょっとした

公園みたいですね。

§4

昼時は早い者勝ちの人気スポットですが、 ほむらと東野の二人は運良くベンチを確保す

ることができました。というよりも、 周囲に遠慮されたのかもです。だって他のベンチは

何処もカップルばかりですから……

「今日は時間が足りなかったからコース半分で切り上げた。 明日からは倍だかんな」

「ちょ、そんないきなり」

あぐらを崩したような格好でベンチにかける東野は、ほむらをまっすぐに見つめます。

にはいかねーからな」 「運良く新緑祭で優勝を勝ち取れたとしても、 それでいきなり探検部の活動開始ってわけ

「わかってる」

拳を握って頷くほむら。

「基礎体力が大切なんでしょ。そのくらいは読んだってば」

お

東野が眉をあげます。

「ようやく読んだのか、探検部のパンフレット」

「まあ……難しいので、すこしずつですが」

「いいよそれで。じゃあこっちも頂くとするかな」

ほむらと東野の 間にはファンシーな弁当箱が二セット置かれ ています。

いいんだろ?」

「……どうぞ」

緊張した面持ちで頷くほむら。

ふたを持ち上げて、弁当をのぞきこむ東野。

「見た目は普通だな」

「……そ、そう?」

魔法瓶に容れたスープを二人ぶんのカップに注ぐほむら。

**「いただきます!」** 

「どうぞ召し上がれ……じゃ、私もいただきまーす……」

相手にカップを渡して、 おずおずと自身の弁当に手をつけるほむら。

勢いよく箸をひらめかせて、弁当をかきこむ東野。

最初の一口目は無表情です。

二口目にしてひどく怪訝な表情になり、 三口目にいたって完全に確信する渋面に変わり

ます。

························-\_\_\_\_

口直しにスープを手にとって、ようやく人心地つきました。

「······

無言でほむらを睨みます。

「……日ノ岡」

「ど、どうかな?」

「もしかして、おまえ料理はじめてか?」

「言わなかったっけ?」

「初耳だな」

東野はもう一度、何かの勘違いであれとばかりに気持ちを新たにして箸をつけますが、

見予はつう

結果は変わりませんでした。 「……日ノ岡。俺はな、 仮にも食わせてもらっている身だ。『不味い』とは言わねえよ」

「イッテマスヨネ?」

「ただ、これで、家庭科部の薫陶を受けた女子メンツが参加するおベコンに殴り込もうっ

て度胸はどうなんだ、あ? なんだ、 ユーモア賞とかいらねえぞ?」

そ、そこまで言いますかー」

「おい、おめえ。それなんだよ」

「え?……これ?」

CGみたいな笑顔で、自分の弁当を背後に避けるほむら。

「オベントウデスヨ?」

全然、中身が違うじゃねえか。なんだそれ」

ほむらが背に隠したのは、一目でわかってしまう母手製のお弁当です。

「だ、だってお母さんが、間違えていつも通り三人分作っちゃったんだもの、

私・妹でワンセットなんだもの」

「ほおう」

「ほら、その試作品一号機もね? 元の食材はれっきとした食べ物だったわけだし、 捨て

ちゃったりすると、 調理によって増加した二酸化炭素とかも無駄になっちゃうし」

「なんで俺が地球環境の面倒をみて、 おまえが人間の食事をしてんだよ」

弁当箱を、ぐりぐりとほむらの顔に押しつける東野。

「おまえ自分で食ってみろコレ。 なんでこの卵焼きはコーヒー の味がするんだ?

「ごめんなさいごめんなさいい」

一気に消沈するほむら。

真顔になり、ぽつりと呟きます。

「交代で試食ってのはどうかな。 あるいはロシアンルー レット的な

「バカ言えよ。明日からちゃんと二人ぶん作れよ。 コンテスト本番じゃあ、

んだぞ。練習にもなんねえだろ」

「ううう、了解\_

昨晩自宅での奮闘中、 味見の段階で薄々わか つ ていたことですが。

献立の雑誌などを持参したほむらですが、今日はとてもその相談どころでは無さそうで

ほむらの性に合いません。

ふつふつと(筋違いな)怒りが湧いてきました。しかし責められっぱなしというのは、ほむらの片

たとえば、 朝のランニングとか

「……ねえところで、なんで私だけが走って東野くんは自転車なのか な。ずるくない?」

「おめえの体力強化だからだろ! 俺はもう朝練は済ませてから来てんだよ!」

「おお。スポーツ少年。さすがだ」

ということは、 いったい朝の何時に起き出しているのやら。

ほむらには全く未知の領域

「東野くんは、一緒にお弁当食べる友達とかいなかったの?」

いねえよ?」

しれっと答える東野。

「……そっか、ごめん」

「弁当っつーか俺はパンとかだけど、 三限か二限の休み時間で食っちまうからな。 他の

中もそんな感じ」

早弁か。 じゃあ昼休みは何してんの」

「バスケだな」

なるほど。ほむらたちのいる中庭から、 校舎を挟んで反対側からは、 ル 0) (ウンド

する音と歓声が聞こえてきます。

「悪いね」

「いんだよべつに。遊びだから。 なのに、おまえとメシ食うんでしばらく抜けるっつった

ら首は絞めるし、 両足抱えてブン回すしよ。 全く、 あい つらにこれ食わせてやりてー

なあ!」

「ハハ……善処したい」

その後、平等に取り分けられた試作弁当を、 時折ああ、 とかうう、 とか呻き声をあげな

がら口にする二人。

渡り廊下の向こうに望む青空には、 銀色の昼の月が神々しく浮かんでいます。

「ねえ、東野くん」

「虚惑星って遠いのかな

「行ってみたくなったか?」

「んだよ」 「ううん、 あんまり」

「っていうか、肝心なことが全然書いてないのよ、あのパンフ。なんか脅し文句ばっかりで」

「仕方ねえだろ。調査官を守るためでもあるんだから」

「あれじゃ、お父さんを説得するの難しいだろうなあ……」

「そっか。うちはすんなりOKだったから、 そこは俺も助言できない な

月を見つめる東野の眼差しは、真剣です。

るか」 いけど。まあ、探検中のメシに毒とか盛られたらかなわねえし。 「御母堂は、 すっかりその気で応援してたけどな。 おベコンに関しては勘違いしてた ある程度予行演習にはな

「私が徹夜で作ったお弁当を毒と、毒とまでいうか」

自嘲気味に呟きながら、スープのお代わりを手渡すほむら。

カップを受け取りながら東野は、ぺこりと頭を下げました。

「……いや、悪い。言い過ぎたな」

「そうだよ」

「気にすんな。どんどん持ってこい ょ。 ζJ くらでも味見してやる」

殊勝に頭を下げるほむら。

「こちらこそお願いします。 正直、 これは他の人には頼めんですわ」

―あまりに恥ずかしくて!

東野は、空に眼差しを戻して語ります。

「虚惑星は距離とか関係ないんだそうだ。 転移の原理は勉強中だし、 それもまだ二回しか

経験してないけど」

「そうなの? 関係ないの?」

「うん。結局は、 人間の都合で決まってるんだと。 虚惑星は数学的な存在だから、 転移の

演算の結果に―――人間の認識にかかってるんだって」

「数学的な存在……」

探検部の活動内容はともかく、 虚惑星の成立やらなんやらのパンフレッ トの解説頁にな

ると一気に眠たくなるのです。

「俺たちの地球とは、捉え方が逆なんだ」 魔法使いを目指すほむらさんが、そんな調子では困るんですけどねえ。

「どういうこと?」

らが立たずで、どれも不正確で完璧じゃない。本当の地球の姿を知るには、 いって理由だけでさ。実際の地図は、面積とか方位とか距離とか、 「ほら。地球は本当は丸いけど、俺たちは平面の地図を使ってんだろ? てみるか、 宇宙から見下ろすしかねーんだよ」 あちらを立てればこち 伝統と使いやす その場所へ行

「あ、その例はわかりやすい」

頷くほむら。

「……だったら虚惑星はむしろ、 実物よりも地図に近いってこと?」

「どうもそういうことらしい。 ややこしいよな」

今さらのようにはっとする、 ほむら。

正式な探検部員でもないのに、そんなこと話しちゃ つ て ( J いの?」

きょろきょろと周囲を見回す彼女を東野は笑います。

「このくらいの情報ならネットでいくらでも拾えるって。 民間レ ベ ルで転移に成功した例

はまだ無いらしいけどな。興味あんなら検索してみろよ」 「パソコン使えない。 メールは携帯で済ませちゃうし」

ぎょっとする東野。

「マジか、おめー。探検部の必須技能だぞ。ネット検索くらい授業でやんなかったのかよ」

といって、東野は携帯……らしきものを取り出しました。

大手メーカーの最新モデルに似ていますが、 見たことのない渋めのカラーリングです。

パンフで見慣れたUNPIEPのマークが入っています。

「おお、かっこいいね! ん……? そのケータイはもしやあの噂の、 二十四時間監視さ

れちゃう発信器付きの……」

て悪用でもされたらマズいから、 「発信器ぃ? GPSな。そ、 探検部の支給品。あとケータイじゃなくて端末だ。盗まれ そりゃあ場所の特定くらいは出来るだろ。 でもな、これ

すげーんだぜ」

自慢げに端末を差し出し、フリップさせて見せびらかす東野。

Σ, ちょうどその瞬間着信が。 振動して発光している様子は、 ごく普通の携帯です。

「……お? 部長だ」

部長の名前に、 ほむらは思わず身構えます。

ロック解除の操作をして電話に出る東野。

「はい、東野です」

「……電話ができるなら携帯じゃ ない <u>。</u>

ぼやくほむら。

はい。 スイマセン-はい。 以後気をつけます」

通話は十秒もかからずに終わりました。

盗み聞いてやろうと、 ベンチをにじり寄ってこっそり耳を寄せたほむらでしたが、

すごすごと端末をポケットにしまい込みます。

に終わり舌打ちします。

かたや東野は小さくなり、

109

「はい?」「怒られた。部外者に、端末を見せるなって」「どうした少年」

のタンクの物陰が、じわりと怪しく見えてきます。 昼休みらしい喧噪に満ちた普段通りの平和な学校ですが……渡り廊下の暗がりが、恐々としてベンチから立ち上がり、また校舎を見渡すほむら。

「やはり監視されているのか……っ」